

泥臭いやり方で勉強しました

昨日に引き続き、英語について書きますね。これからの皆さんの英語学習には参考にならないかもしれませんが、勉強ということについては多少ヒントになるかもしれませんよ。

私は英語のブロック体が苦手です。書けないわけではありません。それよりも筆記体の方がはるかに得意です。中一の二期から、英語を全て筆記体で書いていました。筆記体で書かなければならないわけがあったのです。

中一の時の英語の担当はK先生でした。年のころ三十前半の女性でした。入学した時から、私にはある言葉がインプットされていました。

「K（先生）の千回書き N（先生）の一万回書き」

N先生は異動していかれた方です。K先生は私の恩師です。どちらも英語科で、当時、K先生は生徒が間違えた単語や英文を千回書かせ、N先生は一万回書かせるという言い伝えがありました。今では信じられないことですよね。

数字にはやや大げさなところはありましたが、数字の少ない方のK先生には、翌日腕が筋肉痛になるほど英語を書かせられました。間違えた単語や文一つにつき、二百〜三百回ぐらいい書いていました。だから、時間のかかるブロック体ではなく、流れるような筆記体で書く必要があったのです。

書いたものは翌日提出。だから、家では必死です。間違いが多かった時には、見たいテレビ番組そっちのけで必死に書きました。当時鉛筆を使っていましたので、右手の外側が鉛筆の粉で鉛色に光っていたことをはっきりと覚えています。書いていかなかったら……今では言えないペナルティーが待っていました。皆、英語となると目の色を変えていました。

K先生には、もう一つ生徒たちに課したものがありません。当時早朝と夕方にラジオ放送していたNHKラジオ講座「基礎英語」を聞いて、本文を暗記してきなさいというのです。午前6時頃、眠い目をこすりながら、ラジオにしがみついたこともありました。聞かなかつたり暗記しなかつたりしたら、これまたペナルティーが待っていましたからね。

こんなふうだと英語が嫌いになりそうです。私は逆に英語もK先生も好きでした。大学まで英語をやりましたが、英語で苦労したことはありません。K先生が厳しく英語を叩き込んでくれたので、知らぬ間に力が付いたのだと思います。今でもペンを走らせれば英単語は自然と手から出てきます。体に染みついてしまっているのですね。

当時の英語ですので、話せませんし、聞き取れません。昔の英語の勉強は泥臭さがあるけど、その泥臭さはなかなか取れないものだと言えますね。

（十月十六日 記）